

繪本通俗三國志

四編

三

122

東 京 圖 書 館

和書門

小說類

12  
三六函

七  
七架

七八號

七五冊





繪本通俗三國志四編卷之三

目錄明治十年交換

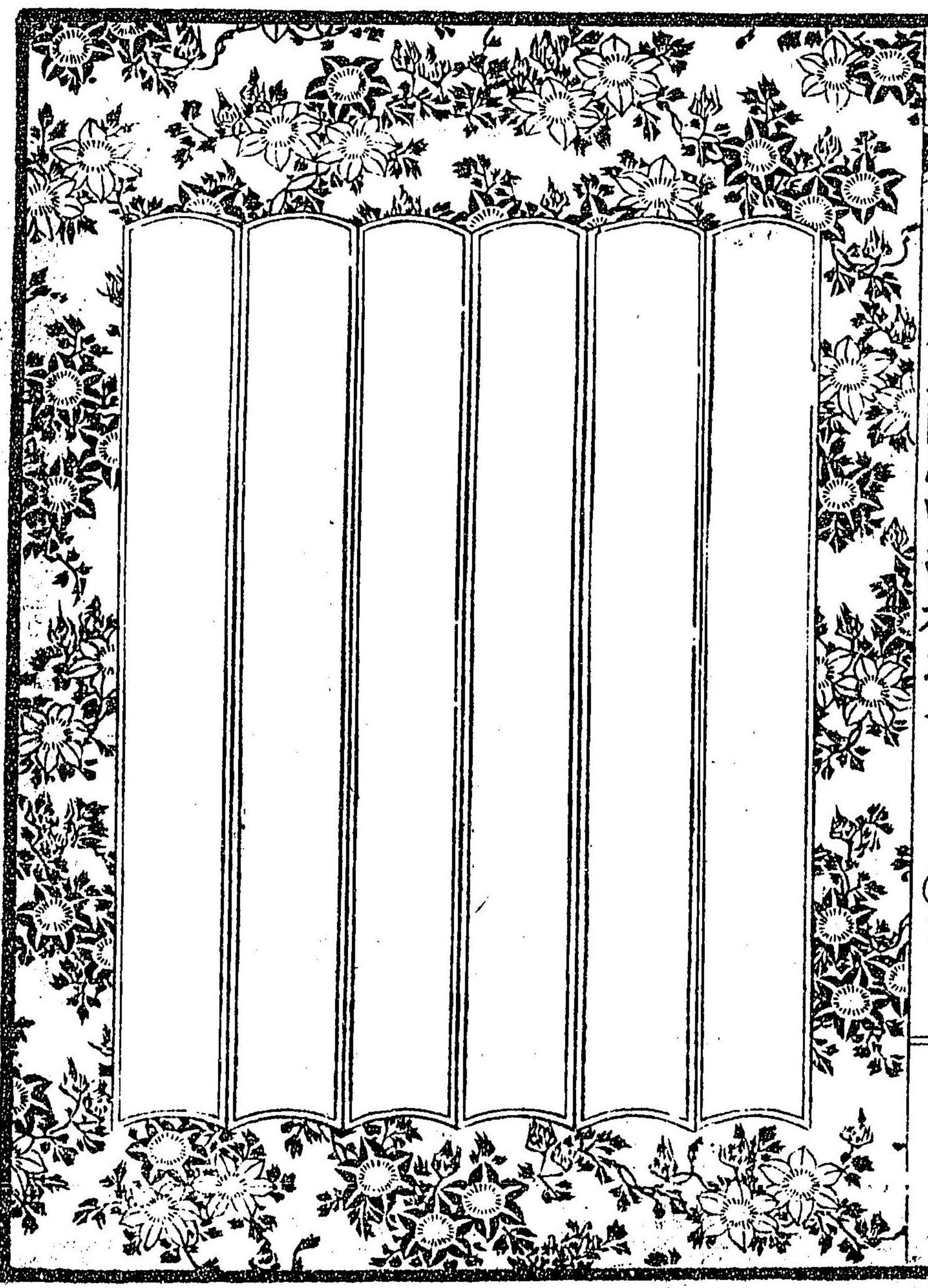
関羽義釋曹操

周瑜南郡戰曹仁

孔明一氣死周瑜

繪本通俗三國志四編卷之三





繪本通俗三國志四編卷之三

関羽義釋曹操

此の曹操は、たゞの勢を以て、  
 創て被ひの矢の中り、頭を焦  
 額で爛うた。たゞの勢を以て、  
 甲の雨は、湿馬物の具も、  
 夷凌の道も、張飛の攻め、  
 大半打棄て走らば、  
 紛紛然として、  
 寒気のを、  
 人馬とも、  
 華容道を、  
 十里を、  
 先陣を、  
 得た。曹操の、  
 人ぞ、  
 問か、  
 前山の、  
 隙の、  
 細路、  
 あり、  
 昨夜の、  
 大雨、  
 土を、  
 碎ま、  
 水も、  
 通ず、  
 斬溝の、  
 ところ、  
 泥深、  
 馬の、  
 足立、  
 水も、  
 大に、  
 怒り、  
 士卒の、  
 山を、  
 下り、  
 路を、  
 水も、  
 橋を、



置かんとぞや深きくく。難きとのの理あらんやと。  
 即時そとく下知げちして傳へる。の羊老創せうらうと負おす。の後陣ごちんとく。  
 屈強くつかうの壯士さうしと先まきとち王おうと荷おひ草くさと運たん。道みちと造つくらば。  
 ありととのの斬きとさしてのひま。兵へいと大半馬たはんばより下くだり。  
 竹木たけきと伐取道はきと造つくのてきとみぐる。跡あとより敵てきの追蒐しゆるとも。  
 ありとと。張遼ちやうりやう許褚きょそ徐晃じやうかう三人さん三百余騎さんひやくよの精兵せいへいと率すす。  
 手てみかとののせ回り道まわりみちと関せきらふ。今斬いまきと奔はす。  
 んど命惜いのちをくび急いそびよとて責せらる。軍卒ぐんそくと飢寒う。  
 たりと死しするもの殺ころす。突つまに甲かの入いり止とまらう。曹操せうそうい  
 ると曰いはく。死生命しせいめいめつ。あんの哀あれと再び哭なみく。の立たち  
 む斬きんとらふ。息いきとみ継つぐ。兵へいと三手さんてみ分わけ。一手ひとて

の後陣ごちんよりあへて追手おひてと拒かぎ。二手にての先まきとんを路みちとひらき。二手にて  
 の曹操せうそうと守護しゆごと。兗州けんしゅうと第一だいいちの難所なんじよと。残のこたる兵へいと  
 計はかりと三百騎さんひやくきの足あき。と甲かの力ちからと。人馬にんばとらへては  
 ちとてたつ。と諸大將しよたいていと立ち。人馬にんばと飢疲うと。一足ひとあしも  
 ともみ得えた。息いきと休やすむ。曹操せうそうい。  
 かく。とむくの敵てきと切きらひ。第一だいいちの難所なんじよと。入いり。又また五六里ごをり行ゆけ  
 落おちた。早く荆けいと及および行ゆけ休やすむ。又また五六里ごをり行ゆけ  
 る。曹操せうそう馬ばと鞭むちと加くへ。天あまとの命いのちと笑わらふ。諸將しよしやう問とて曰いはく。坐ま  
 相あ又またあやと笑わらふ。曹操せうそう曰いはく。人ひとと周瑜しよしゆ孔明けいめいの智ちと深ふかく  
 計はかりと。赤壁せきへきの敗軍ばいぐんと敵てきとむ。因より。



二手の兵を交はせり。其の末に縛り受ん其言  
 一聲の鉄炮耳根のひびき敵の勢五百騎の  
 あり。二手はあつれて討て出さる。前もつても  
 の偃月刀をひきき赤兎馬とあつて。同音の  
 曹操が執事とあつて。魂を失ひの膽をひき。な  
 だひの面を  
 見ゆ。おのの体あつて。曹操が曰く。さ  
 むり。快く討死せん。熟人。さる。士卒の  
 馬疲まて。戦ひのあつた。程景が曰く。  
 関羽が。上なる人。俄に。下なる人。憐れ  
 の。人。の。難。の。身。を。と。り。と。  
 強。の。勢。弱。の。勢。凌。ぎ。人。の。難。の。身。を。と。り。と。  
 仁義を。天下の。丞相むり。深き。恩。を。

事と告ぐ。入の難との。曹操が。曰く。將軍別てよ  
 馬。前。の。馬。上。の。身。を。大。く。曰。く。將軍別てよ  
 関羽も馬上に。礼を。あ。て。曰。く。其君の命を。受  
 け。丞。相。を。待。曹。操。が。曰。く。戦。ひ。破。れ。身。の  
 重。い。入。関。羽。が。曰。く。丞。相。の。恩。を。被。る。と。人。を。  
 白。馬。の。危。を。解。して。報。を。今日。君。の。命。を。受。け。て。  
 固。の。安。ん。ぞ。私。に。放。さ。し。曹。操。が。曰。く。將軍。昔。の。言  
 む。大。將。と。斬。り。し。る。あ。ら。ま。の。恩。を。報。せ。ん。と。い。ふ。  
 古。の。大。丈。夫。の。信。義。を。重。く。と。す。將。軍。の。深。く。春。秋。と





關羽



曹操

曹兵

關羽  
 奮  
 曹操  
 故



明らや人使公之斯が子權孺子と追しめて追ひつゝ關羽を  
 てまき頭を低く言きて元來義を守らるの鉄石のごとくあれ  
 昔の思ひてもなほとぞ。五関は六將と斬たるとも。うまづもとぞと殺  
 まりて情をなほひとて曹操が士卒は戦ひて涙があがると  
 ぞとぞ。まゝとて伐つまのびと。馬をとりて引回し。手下の勢を下知  
 しく路をひらき各分明に放さんとする気色もえ入りし。曹操  
 さまを將と同一を通行りし。関羽又馬を回しとぞ。人  
 て蒐さんとしてまゝ士卒と馬より下涙をあがりて拜伏を関  
 羽さまとて殺さるまのびと。猶豫なく決せざる。あは張遼馬と  
 早やと通し。關羽のまゝとぞ。又朋友の情と起し。長嘯一  
 声。息を放し。曹操虎口の難とのふと華容道で出ると谷

の辺にいらる。残る勢が約二十七騎あり。日をかき。暮れと  
 よん。南郡の程を。一行先々のまゝ。二羣の勢火  
 のて。めげ。一文字。道で入る。曹操大に。この不  
 敵。あつ。生る。の。得ん。人。生。と。生  
 ひま。敵。あ。曹仁が勢あり。曹操再び生た  
 る。地。馬。至り。曹仁。其。赤  
 壁の敗軍。兼。入。出。南郡の城。元。あ  
 存。の。あ。来。曹操。安。と。ま  
 汝。の。叶。ま。幸。邊。来。の。心  
 り。南郡の城。入。張遼。馳。来。関羽。徳。を。終  
 一。入。討。人馬の息。休。曹操。生。残。た。



勢を点極する。矢のなかり病なり。多うく。夜半のいためて俄に天を仰いで哀を哭く。詔將問て曰く。丞相  
 市窟龍潭の危まよのひも怕まる。人気色をえをいませ。城  
 城中に入ぐ人馬もよをあつる。あまごころ哭する。曹操が曰  
 く。まも。郭嘉を哭する。詔將を曰く。郭嘉も死して  
 年久し。いまあまの哭する。曹操が曰く。郭嘉も生く在  
 り。まも。今日の敗て。胸を打ぐ。大に哭き。哀哉。奉  
 孝痛哉。奉孝。惜哉。奉孝。いひ。詔將默然。刻  
 て。夜。曹操ひ。曹仁。今。都。再び兵を起す。の恨を報ぐ。女  
 汝よ。の城。敵攻る。出で戦て。

一事の急ある。二巻の計を遺置ひ。是  
 の。事の。急。ある。二。巻。の。計。を。遺。置。ひ。是  
 づ。南。郡。の。近。付。の。大。將。の。軍。馬。大。に。属  
 する。荆。及び。豫。泰。の。大。將。の。軍。馬。大。に。属  
 する。合。州。襄。陽。の。二。城。に。守。り。曹。操。が。曰。く。荆  
 及び。汝。の。領。事。を。襄。陽。の。夏。侯。停。で。止。て。守。り。合。州  
 の。第一。緊。要。の。處。に。張。遼。を。大。將。と。し。樂。進。李。典。を。副  
 將。と。し。守。り。一。事。の。急。ある。と。あ。る。都。に。注  
 進。せ。よ。手。配。を。し。り。七。百。余。騎。を。率。て  
 て。都。に。回。る。曹。仁。の。曹。洪。を。夷。陵。へ。遣。し。城。を。構。へ。南。郡。の



勢を扶け、周瑜を拒入し、すそのとき、関羽は曹操の  
 のち、後、五百余騎、よくり入り、が、玄徳の軍卒、を敵、  
 馬物の具、を、首、を、あひ、生、取、を、引、で、夏、口、へ  
 回り、ご、ひ、を、あ、ま、ん、ん、ご、の、功、を、傲、り、ら、る、関、羽、一、人、の、一、騎、  
 をも、討、得、を、す、ま、く、城、中、へ、回、り、ら、る、折、節、孔、明、廳、上、の、の、  
 勝、軍、の、賀、を、の、べ、て、居、な、り、ら、る、関、羽、が、回、り、た、る、由、を、ま、き、  
 孟、也、と、い、て、立、わ、ら、る、将、軍、い、ま、世、を、蓋、功、を、立、て、四、海、の、為、を、害、と、  
 の、ぞ、ま、漢、の、逆、賊、を、討、め、り、と、賀、し、く、ら、る、出、て、む、ら、へ、と、い、  
 り、と、関、羽、黙、然、と、し、て、も、の、い、ま、を、孔、明、が、曰、く、将、軍、あ、ま、ん、人、  
 の、無、真、氣、を、入、め、り、と、某、と、い、て、坐、て、む、ら、る、と、怒、り、め、り、と、  
 と、又、左、右、の、人、と、り、ら、る、汝、亦、あ、ん、と、早、く、関、将、軍、の、回、り

ゆ、を、ま、き、漢、を、拒、め、り、と、い、ひ、ら、る、関、羽、が、曰、く、某、と、い、ま、る、來、り、て、罪、を、  
 請、孔、明、が、曰、く、曹、操、華、容、の、道、條、へ、ま、た、ら、る、関、羽、が、曰、く、曹、  
 操、ま、る、華、容、の、道、を、な、り、と、い、ら、る、某、無、能、と、い、く、取、逃、せ、る、  
 孔、明、が、曰、く、ま、る、手、下、の、大、將、い、ら、る、討、取、め、り、関、羽、が、い、  
 ら、く、一、人、と、も、取、得、を、孔、明、が、曰、く、ま、る、御、辺、に、い、り、曹、操、が、恩、  
 を、受、り、し、と、も、い、ら、る、故、り、の、入、り、漢、の、高、祖、を、や、ら、る、丁、  
 公、を、斬、り、ら、る、雍、苗、を、封、じ、ら、る、の、か、ら、軍、法、を、正、し、ら、る、が、為、  
 り、王、法、の、国、家、の、典、形、人、情、と、い、ら、る、私、と、い、ら、る、と、得、ん、  
 御、辺、に、い、り、軍、令、状、と、書、の、入、り、罪、放、し、ら、る、と、武、士、の、命、  
 と、斬、り、め、り、と、す、玄、徳、を、い、ら、る、と、い、ら、る、桃、園、を、  
 と、い、ら、る、誓、言、を、生、死、と、同、せ、り、と、約、せ、り、と、今、ま、る、罪、赦、と、が





三國志卷之三



諸將  
勝軍と祝す  
孔明  
関羽が  
罪と同人

張飛

三國志卷之三



たゞし人々も昔の執言ももてしとて怖る。後ついでに權を  
て免して。後日功を以てその罪を補へんと欲するが  
ふ孔明も免らる。

周瑜南郡戰曹仁

去程に周瑜の曹操が大勢を赤壁まで討破り、諸人の手柄  
を記録して、吳主孫權に報つて、叔父の降人として、具して  
尽く江北に渡り、たゞち女を以て、南郡の城を攻んと  
す。南郡の守は江陵の守あり、并陣を以て、江の畔に陣を  
張五ヶ所、寨を下して、周瑜の中軍を以て、魯肅程普を  
以て、玄徳の事と義をももつ。忽ち玄徳より、孫乾を使として、  
勝軍の賀を述べて、いひ、周瑜も入ると對面も孫乾礼と

やどさ。玄徳の意を述べて、贈物で献り、周瑜問て曰  
く、玄徳はいま何の居るぞ。孫乾答て曰く、いま陣を移し、油  
江口より、周瑜驚いて曰く、孔明も一處あり、孫乾が曰く  
う。周瑜曰く、御辺まで回りの人、某もいふ、行く。玄徳の重  
礼を謝せん。孫乾もいふ、とて、出れば、魯肅が曰く、都督もいふ  
ま、周瑜曰く、玄徳が油江口は陣を移し、南  
郡を攻取ん為あり。今魯肅破いて、許多の軍馬  
錢糧を費せり。いま南郡を取ると手の中あり。玄徳さへ、い  
取んとす。周瑜曰く、孔明もいふ、周瑜曰く、孔明もいふ、  
計を以て、周瑜曰く、孔明もいふ、周瑜曰く、孔明もいふ、  
い。周瑜曰く、孔明もいふ、周瑜曰く、孔明もいふ、南郡を



取人曹肅が曰く。其の行かざる用意をせよとく勝れし  
 る精兵三千余騎を油江口へ送りし。孫乾が油江口へ回りて  
 周瑜が曹肅を来りし由を告げし。周瑜が曰く。孔明が  
 孔明が曰く。さきわきの贈物にいらざる。孔明が来りし礼を  
 せんや。周瑜が来りし。南郡の為あらん。玄德の曰く  
 も。兵を来りし。孔明が曰く。周瑜が来りし。孔明が来りし  
 是の計の又入る。孔明が来りし。兵船を  
 油江口へ送りし。岸の上軍馬を整理し。相待  
 りし。周瑜三千余騎を引く。曹肅ととも。孔明が  
 趙雲の五六騎を引く。生む。孔明が  
 軍馬の備を整えし。内安らむ。孔明が

轅門の辺にいたる。玄德孔明出む。礼をのべて坐  
 定りし。玄德が曰く。孔明が功を称し。酒  
 數巡をとりし。周瑜が曰く。玄德公は油江口陣を移  
 し。南郡を攻めし。玄德の曰く。將軍  
 の南郡を攻めし。戦ひなむ。將軍取  
 りし。周瑜が曰く。南郡を取し。掌の内。玄德  
 の曰く。戦ひの勝負は。古より。取  
 世の羨む。事無必取。曹操  
 都へ回り。曹仁と。南郡を。將軍  
 る計あらん。曹仁は万夫不當の勇あり。將軍











たといさの五百騎と目前より進み入る將軍の軍の  
城と出るのさるる曹仁が曰くあく牛金りてさるる  
南郡の城と守らん。日も叶はた。さるる出るとさるる  
甲とてあびり馬と打乗居強の勢と數百騎を城  
外へうがまき出さる陳矯の櫓のさるる大鼓とあさるる威と  
なまき曹仁兵とて吳の勢と壕のさるる隔とさるる百歩を  
さるる逼るさるる同音と喊とて造り馬と飛と壕と超た  
ださるる吳の勢の真中と突と入るる徐盛のさるる戦と當とあ  
さるる馬と回とて走りさるる曹仁氣のさるる中軍と斬と入  
吳の勢と四角八方へ蒐散とて牛金とさるる出とさるるさるる  
あさるる残りたる兵五六十騎大勢と圍とて出るとあさるるさるるけ

と曹仁又蒐入敵の大勢と十方に討散と味方と引と  
出ると吳の大將蔣欽路とさるる令とて討止んとす曹仁の  
さるる勢と散とて通りさるる牛金と力とあさるる戦と  
とたさるる曹仁の弟曹純も又城と出と蒐たのさるる兩方  
の勢と入とさるるなまきさるる戦とひるさるる吳の勢と入とさるる  
さるる曹仁勝軍と収とてさるる城と回と陳  
矯も出と入と孟とあびり賀とあさるる。今日の戦とさるる將  
軍の真の天神ありとてさるる城と守とる徐盛將欽  
とさるる員と同とさるる周瑜大と怒り斬と奔とてさるる  
諸將やうくと命とさるる周瑜再び兵と揃とさるる  
南郡と攻んと義とさるる甘寧諫とて曰とさるる向とさるる



甘寧  
曹洪と  
二十余合  
戦ふ

曹洪



甘寧





曹仁夷陵の城を築き曹洪を龍て特角の勢に  
 三千余騎を率いて夷陵の城を攻め  
 將軍の南郡を攻め周瑜志うんとて甘寧を  
 千余騎を付たち江を渡りて夷陵の城を圍む  
 細作を遣て聞く曹仁の由を告曹仁大に驚き陳  
 矯を召て計を議さる陳矯曰く將軍より夷陵を  
 南郡を圍む守りて曹仁を圍むは  
 弟曹純を大將として牛金を副將として夷陵の城を  
 曹洪を計を授け敵を  
 夷陵の城を攻る曹洪城外を討て二人戦二十余會

曹洪叶を引退く甘寧勝みの以て忽ち城を乗取  
 曹純牛金を後詰の勢を以  
 兩方よりさしてを圍んで攻たり甘  
 寧戦ひ不利と失ふ城中の困を以て出るとのなき  
 由周瑜が陣をまき入る周瑜驚ひて評議す  
 程普が曰くは兵を分てまき入る周瑜が曰くは  
 第一の本陣あるを以て兵をまき入る夷陵を圍む曹  
 大勢を以て攻ましたんは時兩方より  
 由を以て大のあり呂蒙を以て  
 國股肱の忠臣あり。いまは  
 人と用ひん周瑜が曰くは



遂に其の陣を破り。なまじりて其の本陣を守らば呂蒙が曰く。凌  
 統とて其の軍を破る。其の先手として。都督後陣  
 を守り。たゞち夷陵の軍は十日と坐せしめて功を成し。  
 周瑜が曰く。いづれ凌統の大事と勤むべき。凌統が曰く。  
 十日の間のいづれ其命とせしめて守らば。十日の外は  
 其が力より其の軍を破る。周瑜が曰く。二万余騎とて凌統  
 の本陣を破る。即時に兵を引いて夷陵の城を圍ふ。呂蒙  
 が曰く。夷陵の南はけし小徑あり。夷陵を攻るより其の  
 便あり。たゞ五百の勢を谷の内より伏して柴薪を積りて路を  
 へぎらるる人敵も破りて走らざる。尺をくその馬をうか  
 べ。たゞち勝るのいふ兵を南郡と取と卵と塵と

とくあがし周瑜之に従ひて維つたつ困り突き甘寧は  
 いまきしと問ふ。周瑜泰きと坐せしめて其の先手として  
 して馬の力とせしめてなまじりて。突き曹純が勢  
 を討つ。入らばち突きて夷陵の城下よりたつる。甘寧槽  
 より其の軍を破りて城を出て入る。周瑜が其の軍を  
 しめて其の軍の内より其の軍を破りて。日暮軍の兵糧を  
 討つ。出て採合せんと議を曹洪。曹純。牛金とて其の  
 甘寧の事と相議し。周瑜が接しの勢をきたる。其の  
 しく拒むべき。其の軍は牛金が曰く。其の南郡に入らば  
 其の先手として拒む。曹洪は其の軍を南郡の  
 城へ入て遣りて曹仁の計とて其の兵を分て相待らる。



きの日吳の勢攻来り。鼓の声大なる。曹洪きり討て生  
 火とちかして戦ふ。甘寧周泰夷陵の城を推ひ  
 二手にわつぎて殺し。曹洪みだりて。走らば  
 走らば吳の勢かあまざと。操だの。曹洪曹純一  
 案のどと。路を積たる。柴新さへ。馬をきたり。物の具  
 吳の勢馬を得り。三百余匹。十分の打勝。周泰息  
 継せ。追うけ。南郡の城外。又入る。攻戦。日  
 も昏。迫り。軍を収める。

孔明一氣死周瑜

去程の曹仁が勢たる。破る。南郡の城に入。計を  
 急あり。丞相の遺し。計をひら。難と。曹仁が曰く。汝が言。合りと。五更に兵糧を  
 喜び即時。下知を傳へ。五更に兵糧を使ひ。明方。城中  
 の勢。とく。打て。生矢。倉の上。旗幟を立て。人ある。体  
 寧。夷陵の城。乘取て。後。南郡の城。將臺の上  
 上。城の勢。三手。分。先倉の  
 上。旗を立て。人あり。



又其の城を以て生るやとて、腰を兵糧に付たり。曹仁  
は其の城を守り、のちのち、二手の勢を左右に、先  
陣も、勝を乘りて敵を追ひ、たゞ金であらざるに、  
何くも、追蒐より下知りて、程普を後陣とし、周瑜  
が先手、まゝ、鼓を打、喊を作り、曹洪馬を  
乘りて斬りて、周瑜鞭をあげて、さし、  
戦ひ、三十余合ありて、曹洪引退くは、  
曹仁馬を以て、大音をあげ、周瑜、  
勝負を決せんと、つり、呉の陣より、周泰馬を

生し、二人戦ひ、十合あり、曹仁打負りて、走り、  
中大を過ぎて、後陣より、逃崩し、曹仁曹洪且戦ひ、  
周瑜、  
を以て、殺し、  
曹仁一支、  
間もなく、追討し、  
人、  
息を、  
内、  
上、



合圍の鉄炮とひびく。はるる。両方より殺すの伏勢一度  
 起り怒りて放りて雨す。もまびく。さき間もよく斬る  
 り。周瑜大よび。さき。引回さん。手下の勢  
 互よ。合とて。く陥坑。さき。上と下へ。毒蠱。射  
 る。おのね。さき。周瑜へ辛き命。な。馬  
 て飛して走り。流矢。一。左の腹。射。射さる。  
 急所の痛手。さき。馬。さき。城の中。され  
 して。大将牛金兵。下知。討て。首。さき。さ  
 川。徐盛。下奉。返。近付敵の馬の熱膝  
 薙く。馭。落。二人。命。拒。間。周瑜へ士卒  
 な。城。進。延。城。中。の。兵。勝。の。心。で。追。は。

攻なり。呉の勢。踏。斬。落。て。殺  
 大将程普。後陣。押。軍。収。ん。す。  
 曹仁。曹洪。二。手。斬。て。内。外。攻。な。り。さ  
 呉の勢。い。あ。く。あ。つ。程。普。も。老。く。さ。る。あ。ま。の  
 大将凌統。一。軍。を。率。て。あ。つ。あ。つ。討。て。出。で。勇。震。て。戦  
 ひ。曹。仁。の。兵。を。率。て。尽。く。城。中。に。籠。る。程。普。敗。軍  
 收。め。る。手。負。討。死。す。の。ね。て。徐。盛。下。奉。二。人。周  
 瑜。を。な。ま。け。て。回。り。中。軍。の。医。者。を。め。り。て。鉗。め。て。毒  
 と。掘。出。し。薬。を。め。り。て。瘡。の。口。を。塞。ぎ。し。る。痛。手。を。其  
 苦。痛。た。ん。が。く。飲。食。も。な。ま。瘡。も。ら。り。医。者。や。ら。る。ま  
 矢。の。毒。を。傳。て。射。た。り。の。人。も。あ。ら。く。痊。ぐ。し。



周瑜流矢前中落馬



周瑜



周瑜流矢前中落馬







志。怒心也。癸一むべうきと入り。そのあつて毎日。敵の勢攻  
 きたりきとあぐむ言るといふも。其卒に都督の報せむ。周  
 瑜が白く。汝亦出て戦ふさうかあ人も。程普が白く。諸將  
 まの志づくと。國は引退ま。都督の瘡を養ひて。再び入出  
 といふまのあ人の戦も。周瑜まもあ人を。床の上よりおぬ  
 起さやん。大丈夫の士。さぞ君の祿を受て。戰場討  
 死して。馬の革とあつて。屍を裏も。故國は回る。本意とも  
 あんぞと二人の故とあつて。國家の大事と。癸はなやとて  
 甲とつて馬ののりらと。諸將も。駈うきといふまは。周瑜  
 旗の下とつて。周瑜。彌子の。このあつて。矢は弱りたるも。

大音と云ふ。周瑜の馬とせし。曹仁は夫  
 いう周郎といふも。曹仁は兵といふ。周瑜が生てあ  
 へ。怒心と癸して。氣と。激さる。あつて。重る。このあつて  
 まけり。汝亦さる。悪口。周瑜が。怒らる。このあつて  
 軍卒。大音。曹仁。厚し。周瑜。潘璋。馬と。生て。入と  
 うり。なま。出て。敵と。破らん。このあつて。血を吐て。馬を  
 倒。周瑜。曹仁。二。同。斬て。入。亂と  
 て。攻戦。諸將。命と。周瑜。前。立塞り。このあつて  
 さく。回り。程。普。敗軍と。收め。周瑜。見へ。病の。

會見 新編 太平御記 卷之三



と問ふ。周瑜ひそひそと告ぐ曰く。さきまが計をあき人爲あり。程普が曰く。いふある計ぞ。周瑜が曰く。さきま矢瘡を患ふ人。よき計あり。曹仁は病の重て志すも人。よき計あり。周瑜は馬より北落たり。よき敵をわきまひく計あり。よき計あり。物馴たる兵とあるは南郡の城を行て。周瑜と程普と金瘡破まで死たり。よき計あり。曹仁は夜討に来るべし。味方四方は伏撃を置取巻とさしめて攻むべし。曹仁と擒ませ。程普大に喜び。よき計あり。妙あり。即時に衆を發して哀を哭き。周都督矢瘡起ひて已む。亡くんと沙汰して。陣々を變の服と着たり。よき計あり。曹仁は城中よめりて。諸將をよめり。今日周瑜怒を發して。

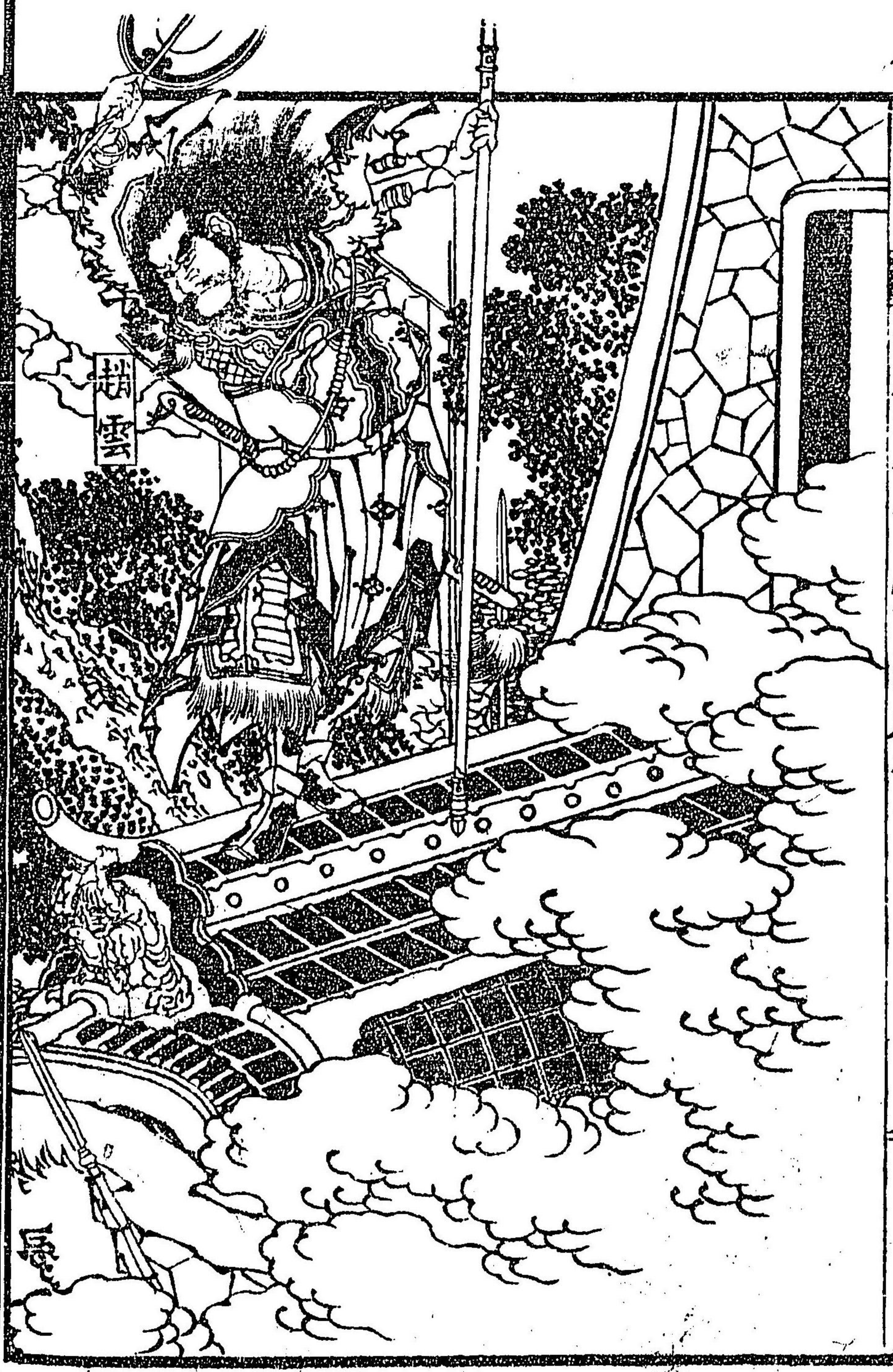
金瘡破まで。血を吐て馬より倒れ落たり。よき計あり。死に。よき計あり。暮まで。よき計あり。吳の陣より。軍卒十余人走きたり。一大事と告ぐ。よき計あり。吳の兵あり。その内二人は初め曹仁が手は生取して。免さる。よき計あり。曹仁を見へ。今日周瑜金瘡をぶ。陣中の回りに。ちみちひたり。諸將ひそひそと。呉の陣中。程普は恨めりて。今さき降参をとり。よき計あり。曹仁は。恩賞をよめり。よき計あり。吳の陣を却して。周瑜が首を取都よのむ。丞相の御感。よき計あり。相親しむ。陳矯が曰く。よき計あり。よ行はざらん。吳の勢はあらず。國より。曹仁のよき計あり。



曹純と後陣と。初更の比どぐく城で出た。ちの吳の陣より中門を突くと入る。敵一人も入らざり。旗を舞ふ。敵の計は落さざり。出よりの程をあれふ。東の門より韓當、西の門より周泰、南の門より徐盛、丁奉、北の門より陳武、呂蒙、喊して討つ。追取らるる。一支部を討つ。南郡の城を逃回る。曹仁大勢をいづくも立て前後を度やう。切救曹洪、曹純が

後陣の備了。一手は多戦ある。士卒の大半、討て五更の比まで戦へ。入る勢あり。南郡の城は近あり。退いて。二声の鉄炮、耳根をひいて。夜に二軍路をさ入り。戦ひ疲れたる曹仁、勢を引、色を攻む。曹仁、陣を横とて、出入り。又甘寧が二軍路をさ入り。四角八方より攻む。南郡の城は入て。あつた。南郡の城を取ると。周瑜、程普、十合を打勝て。孔明の下知を受け。城をの





趙雲



孔明が  
下知と導き  
趙雲が  
南郡城と取る

周瑜

程普



取たの。常山の趙雲ありて。大音まびつり。氏  
 き。周瑜大に怒り。いそいで甘寧とまんで。荆夏の城へいそ  
 へ。凌統とまんで。襄陽の城へいそへ。あまの二川の城とま  
 て。そのうち南郡と取んよふて。兵の手分とまらぬ。忽ち早  
 馬をせきたり。孔明とまらぬ。南郡の城と取て。後兵符とま  
 て。荆夏の城へいそへ。いそ南郡とまらぬ。危し。早くまらぬ  
 て。まらぬ。いそへ。いそへ。大將兵符とまらぬ。藏  
 ありて。いそへ。いそへ。調て。出らぬ。孔明とまらぬ。張飛  
 遣置。即時に城と奪ひて。却て。曹仁と攻破ぬと告  
 ぐ。周瑜大に愕くらぬ。又襄陽より早馬をきたり。孔明符  
 とまらぬ。襄陽の城へいそへ。遣し。曹仁とまらぬ。呉の勢を問  
 たり。

来りて。まらぬ。いそへ。いそへ。城と守る。大將夏侯惇とまらぬ  
 とまらぬ。兵とまらぬ。打出らぬ。孔明又関羽と遣し。忽ち  
 二城と奪ひ取り。二所の城とまらぬ。と費とまらぬ。まらぬ。徳  
 とまらぬ。たり。告ぐ。周瑜が曰く。孔明いそへ。曹操が兵  
 符とまらぬ。取得たる。程普が曰く。孔明とまらぬ。南郡の  
 城と取て。長史陳矯とまらぬ。生取たり。兵符とまらぬ。あまの人の  
 許あり。周瑜とまらぬ。まらぬ。あまのまらぬ。金倉又忽ち  
 破きて。地の上へ死らぬ。諸將とまらぬ。起し。半時と  
 くらへ。生出たり。周瑜牙と咬て。やらぬ。孔明とまらぬ。教  
 ぐ。南郡とまらぬ。いそへ。安らぬ。程普とまらぬ。力とまらぬ。早  
 く南郡とまらぬ。そのうち國とまらぬ。まらぬ。計とまらぬ。



魯肅が曰く、今玄徳と國とあるを、曹操なるをも、虜の心で攻  
 敗いせと分たせざる、呉、又合肥を攻め、勝負の色料がた  
 きたらん、況や玄徳は、曹操と交を深き、いよ又も、  
 力とあせし、一同に呉へ攻来さべし、拒ぎぬらん、周瑜が  
 く、今赤計とゆひ、曹操が大軍と赤壁にて打破り、  
 の金銀兵糧を費し、人馬を損ひ、荆及び玄徳を取  
 して、根を断つ、魯肅が曰く、都督志が、怒と体、  
 某の行で、玄徳と對面し、道理を責て、荆及び、

さん、も、一、あ、と、ま、ま、と、兵と起した、人、諸將と  
 あり、と、聞て、あ、と、い、ま、と、入、と、諸將と  
 あり、と、ま、た、魯肅、南郡の城、行門と、い、け、  
 たり、と、趙雲、矢倉より問て曰く、い、あ、も、人、あり、と、来り、  
 入り、魯肅が曰く、と、玄徳、見、て、や、と、ま、事、あり、趙雲が  
 曰く、主人の孔明と、荆及びの城、あり、魯肅、南郡、荆及びの  
 城、の上、の、旗、と、立、あ、と、整、と、  
 備、あり、と、孔明、の中、孔明、尋常、の人、あり、と、  
 門、あり、と、魯肅、きた、と、孔明、あり、と、  
 城、門、あり、と、魯肅、入、と、禮、と、あり、と、賓主、の、坐定り、  
 魯肅が曰く、主人孫權、の、某、と、使、た、と、曹操、



こまきよ百万の勢を以て江南を下るにや。志は実の玄德と論  
 はせ入為あり。志あるまが國がかくの錢糧と費し。許多の  
 人馬と損ひ力て尽し。幸ふ曹潔と討破りた。五兵荆及び  
 てのがくまが國を屬まきま。今却て玄德の計を用ひ  
 て荆及び奪ひし。ついでにありある理ぞや。後ぞくもそのの  
 きらう孔明答て曰く。曾肅は本より高明の士あり。あまよ  
 浩る事といひも。ぞむ。荆及び呉主孫權の國を  
 のらむ。すあへち劉表の基業あり。まが君劉皇叔あり。ま  
 さあへち劉表の弟あり。劉表まよまよ亡びし。人々の人  
 子劉琦あり。在ま劉皇叔あり。扶け叔姪とま。荆及び  
 治て。父兄の基を継ぎ。ついでに。たま。ま。あ。れ。と。不。可。あ。り。と。い。は。ん。

古より物見まといひの。夢とま。ま。ま。曾肅が曰く。劉  
 琦の國を保ち。ま。ま。ま。道の當然あり。ま。ま。國の  
 綺ひ。ま。ま。劉琦江夏城あり。ま。ま。居  
 め。孔明が曰く。御辺に。疑ひの。ま。ま。直に對面し。ま  
 と。左右の命令。ま。ま。劉琦。呉風の後より立坐  
 従者二人は左右の手を。ま。曾肅ま。ま。ま。病  
 伏て礼を。ま。ま。幸ふ。免し。ま。ま。坐し。著る。ま  
 曾肅色。ま。ま。默然として。言。ま。良。久。ま。若  
 劉琦世を。ま。孔明が曰く。劉琦一日の世  
 居る。ま。ま。一日。荆及びの主あり。ま。ま。世を。ま。ま。め  
 別。ま。ま。曾肅が曰く。劉琦。ま。ま。世を。ま。ま。

新編 漢書 卷之三 四 漢書 卷之三



荊州を以て呉に回し、孔明が曰く、其の言はよしと。公孫權は  
 酒宴をありてありけり。曾肅はこれを見て本心を  
 入り、周瑜を見て右の由を告ぐる。周瑜怒りて曰く、劉琦は年  
 若し壯士あり、いかに死して、荊州を返さず。曾肅が曰く、都  
 督の安んずる人、某々しうさむし、いかに荊州をとり  
 うへき。周瑜が曰く、いりある人ぞ。曾肅が曰く、劉琦  
 が体とえ、酒色をまわすと、酒色をまわすと、その病四肢に  
 いま白色瘦衰へて、気喘き血を吐く。半年とまて、さう  
 うあつと死せし。そのと、荊州を取らん。玄德は新  
 と得ん。周瑜のいふが怒りて、休むいさせ、議をわすれ、主  
 早馬を飛し、いかに麾下の勢を引、合淝の城を攻るとの命

也。敵強しと。寄手やむと。公孫權は敗れ、荊州を打棄  
 て、早く回ってきたと。下知しければ、周瑜をいひ、得  
 兵を收め、まわると。柴桑を回し、病をわすれ、程普は  
 して、兵船をとり、合淝をわすれ、呉主孫權が戦ひを  
 助けし。

繪本通俗三國志四編卷之三終

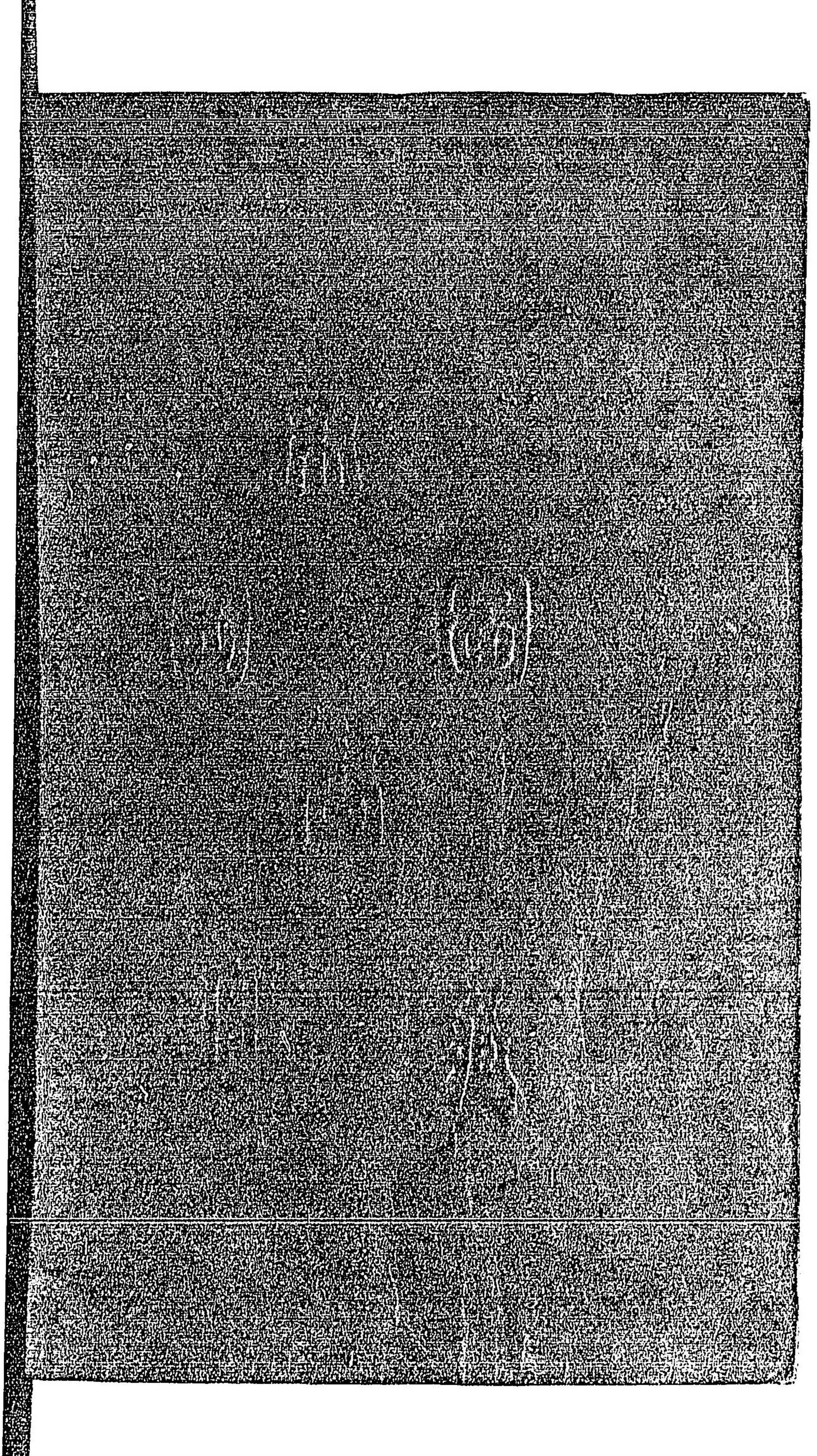


122

74

28







122  
74  
28

繪本通俗三國志

四編

三